

県営圃場整備事業（伊那市手良地区）

堤林・島崎遺跡緊急発掘調査報告書

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

城館跡を含めた遺跡は各々の地域での政治・経済・文化・軍事等々の各種の方面からみて、重要な組手であり、かつ、各々の地域での各々の地域史をひもとくのに好資料であることを何人も認めるところであります。従つて、遺跡なくしては地域の歴史は語れないと言つても過言ではない現状であります。

近年、我が国は急激な経済発展を遂げ、この動勢はこの伊那市へも怒濤の如くに及んできました。それとともに、各地に新しい開発の波が浸透し、貴重な遺跡が破壊され、消滅しそうとしている現状です。これらを保存し、後世の人々に残しておくことは現代生きる我々の責務と思います。

この発掘調査は、長野県南信土地改良事務所によって行われる県営圃場整備事業によつて、梅雨時から猛暑にかけて発掘調査に努力、精励された園長友野良一先生、調査員各位、作業員各位、調査の進行に多大な便宜をはかつて下さった南信土地改良事務所職員一同、地元土地改良区役員、地権者各位に対し、心より深く感謝を致すとともに厚く御礼申しあげます。

最後に、発掘調査によつて得られた成果並びに知見については、この報告書の一読を願いつつ、今後、大いに活用されることを望み序と致します。

昭和六十一年三月

伊那市教育委員会教育長

伊沢 一雄

凡例

一、今回の発掘調査は県営圃場整備事業に伴なう、土地改良事業で、第一次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

二、この調査は県営圃場整備事業に伴なう緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が発掘調査團を結成して実施した。

三、本調査は、昭和六十年度中に業務を終了する義務があるため報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆすることにした。

四、本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。飯塚政美

○図版作成者

○遺構および地形

友野良一 飯塚政美

○土器及び石器実測図

飯塚政美

○写真撮影

○発掘及び遺構・遺物

友野良一 飯塚政美

五、本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があつた。

一 発掘調査の経緯

手良地区の土地改良事業は昭和五十一年度に中坪地区で最初に着手致しました。この事業に伴なつて砂場遺跡の発掘調査を実施致しました。昭和五十四年度には中坪区上村部落の水田一帯が土地改良事業区内に含まれるとのこと、事業実施前に施工地区内に存在する上村遺跡の緊急発掘調査を行いました。昭和六十年度事業地区内は手良八ツ手地区であり、この中には堤林・島崎両遺跡が含まれております、夏場に発掘調査を実施いたしました。

昭和六十年六月七日 南信土地改良事務所長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。発掘調査に着手する前に伊那市教育委員会を中心にして堤林・島崎遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

二、調査の組織

堤林・島崎遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	北村 誠	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	山口 豊	伊那市教育委員会委員長
調査事務局	村山 幸義	伊那市教育委員会教育次長
	蟹沢 典人	社会教育課長
	柘植 晃	課長補佐
	宮原 強	係長

調査事務局 岩坂 政美 伊那市教育委員会社会教育課主任

高木いづみ 主事

発掘調査団

團長	友野 良一	日本考古学協会会員
副團長	根津 清志	長野県考古学会会員
	御子柴泰正	"
調査員	福沢 幸一	"
観察員	坂塚 政美	日本考古学協会会員

小池 孝

三

位

置

【作業員名簿】 酒井岩夫 池上大二 三沢寛 大野田英 大野

田三千代 堀橋程三 後藤重美 酒井とし子 柴佐一郎 登内政光 小松善恵 伊藤勝 登内昇 網野実子 (敬称略順不同)

三位 位 置

堤林遺跡、島崎遺跡は、長野県伊那市手良八ツ手竹の内部落に所在する。遺跡地までの道順は次の通りである。国鉄伊那北駅で下車し、東側三〇〇m程行くと天竜川が南北に流れている。この川にかかる二条橋を渡って、直進二〇〇m程東へ行くと、三叉路の交差点があり、このところを左折して、進路を北にとつて直進していくと、手前より上牧、野底、樋島の聚落が道路をはさんで西、東に点在している。樋島の聚落の北はすれに東から西へ漸沢川が流れおり、この川をはさんで南側は伊那市樋島、北側は箕輪町樋島となつておる。いわば行政体の境界線になつておる。箕輪町卯ノ木集落の南端の信号機のある交差点を右折して、約一km程行くと、八ツ

手部落がある。堤林遺跡は真宗寺の南側に、島崎遺跡は八ツ手公民館の西側にそれぞれ展開している。

四 地形・地質

堤林遺跡、島崎遺跡の両遺跡はともに八ツ手川に面している。前述した微地形を述べてみると次のようである。堤林遺跡は東から西へ傾斜する山麓扇状地の扇端部に該当し、標高は六三十 m ～ 六五 m 位を測る。島崎遺跡は北から南へ傾斜する山麓扇状地の扇端部に含まれ、標高は六二十 m ～ 六〇〇 m 位を測定できる。両遺跡とも八ツ手川との比高差は五 m 位ある。八ツ手川は最終的に棚沢川と合流し、天竜川に注ぎ込んでいる。いわば天竜川の支流の支流である。

次に両遺跡の地質を考えることにする。双方の遺跡は前述したように山麓扇状地の扇端に位置しているために後方からの押し出しがによる堆積土が厚く覆つており、おそらく、ローム層に達するには平均的にみて、表土面から二五位下層まで掘らなければならない。堆積土の成因が押し出しによつていたために、大部分の土層に砂質分が多く含まれていた。層位は上から耕土、黒土、黑砂褐色土、茶砂褐色土、黄砂褐色土、ローム層の順になっていた。

五 周辺遺跡の歴史的環境

手良地区は伊那市東部地区に含まれ、天竜川左岸地域にあたつている。この地域は天竜川による河岸段丘と、天竜川の支流である三峰川と棚沢川によって形成された河岸段丘と、扇状地が存在し、その上を厚いローム層が覆っている。

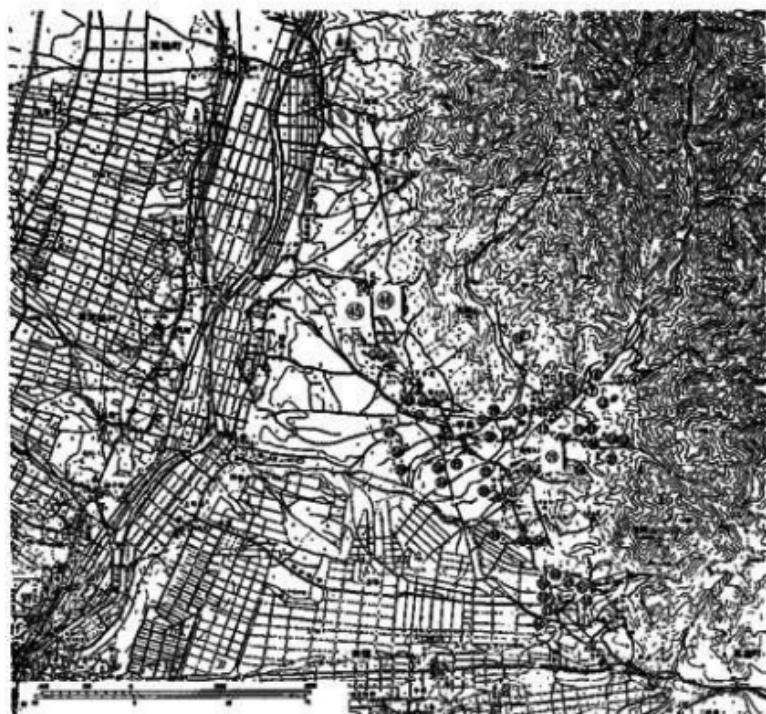
次に遺跡分布の状態を考えてみよう。棚沢川周辺に濃密な遺跡の

点で結ぶ分布帯が広がっている。手良の名が文献上に初めて登場するのは平安時代承平五年（九三五）倭名類聚鈔からである。この文献のなかに手良郷の存在が実証されている。中坪区の北端、竜ノ沢川の上流に大百濟毛、小百濟毛という地名が現存しており、この場所付近に古代の手良公と称する釋化人が居住していたと伝承されている。手良に散在する遺跡数は、約五十カ所に近い数値を示し、そのほとんどが棚沢川によって形成された河岸段丘面、扇状地面に存在している。棚沢川は伊那山脈鉢伏山（一四五五 m）に源を発し、全長約九 km を流れ、福島区で、天竜川に合流する。

手良における縄文早期遺跡としては浜弓場、所洞、ワランベ、松太郎塚があげられる。縄文中期の遺跡として所洞、辻垣外、地神原、官の平、東松、鳴神、狐垣外、松太郎塚等々があげられ、縄文晩期には火葬墓とみられる野口遺跡がある。南垣外からは平安時代の灰釉陶器長頸瓶と人骨が出土した。南垣外から福島地帶まで約一・五 km の広い一帯は手良郷の中心地として考えられており、そのなかで最も注目されているのが福島遺跡である。

笠原堂垣外遺跡からは古式土師器の良好なセットと住居址が発見され、また、かつては、矢塚、山伏塚の古墳が存在していたが、現在は消滅している。山伏塚には石棒や石製品を八十九本立て、雁高大明神として祀られ、かなりの信仰を集めていたと伝えられている。浜弓場遺跡の南側にある貯水用堤造成の時に、多量の人骨が出士したと伝えられている。

今回の発掘調査を実施した堤林・島崎遺跡付近には中世・近世に



第1図 位置及び遺跡分布図

遺 跡 の 名 称

- ①沢 山 ⑩矢 塚 ⑪東 松 ⑫小百濟毛 ⑬六道原 ⑭辻 西 堀 ⑮林 越
- ②ヨキトギ ⑯野 口 烟 ⑰占 八 橋 ⑱近 洞 ⑲野 口 ⑳島 峠 ㉑昔 落
- ㉒鮎沢桜林 ㉓金 山 ㉔政治垣外 ㉕上 村 ㉖下丁良中 ㉗堤 林 ㉘富士塚
- ㉙フランベ ㉚毫 の 沢 ㉛中 原 ㉜社 宮 地 原 ㉝山 の 田 ㉞古 風 敷
- ㉞入 林 ㉟鳴 神 ㉟石 見 堂 ㉞宮 の 平 ㉞大 原 ㉞神 手 原 ㉞城 山
- ㉞大 上 ㉞山 伏 塚 ㉞二 十 平 ㉞砂 場 ㉞松 太 郎 塚 ㉞日 向 烟 ㉞浜 弓 場
- ㉞飯 垣 外 ㉞丸 山 ㉞地 神 原 ㉞清 水 洞 ㉞南 垣 外 ㉞笠 原 家 垣 外
- ㉞鳥 ノ 宮 ㉞向 田 ㉞小 萩 原 ㉞柳 の 坪 ㉞角 城 ㉞堤 下
- ㉞辻 垣 外 ㉞堀 垣 外 ㉞大 百 浄 毛 ㉞柿 の 木 ㉞垣 外

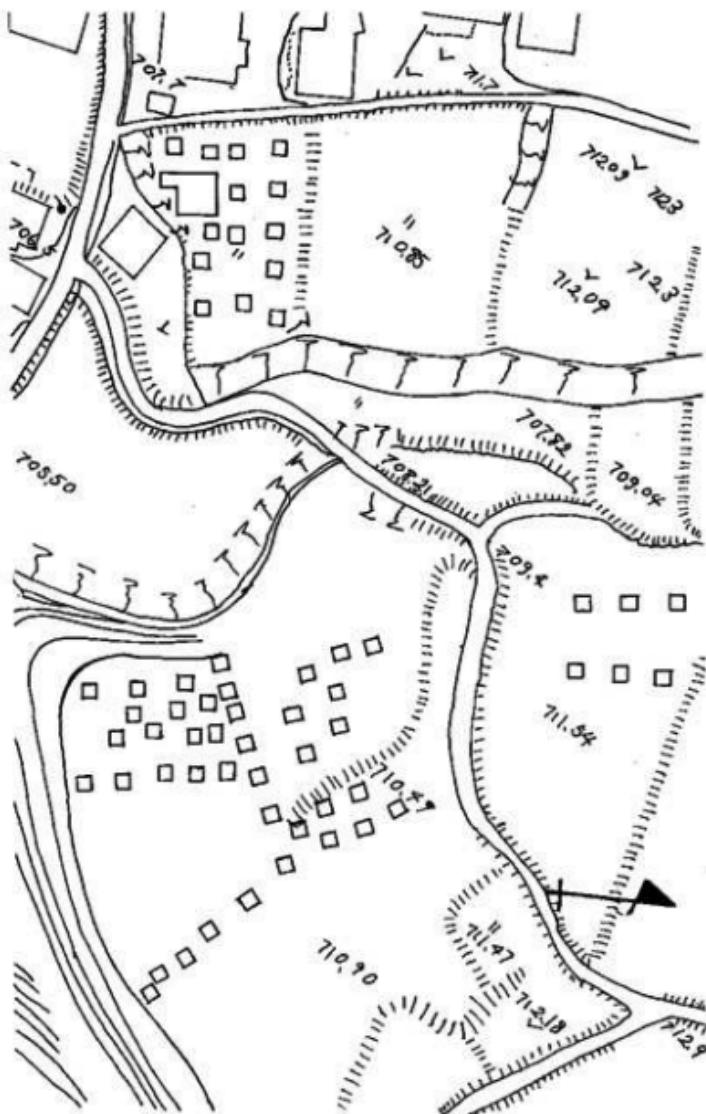
関連した城跡、神社、堂が存在しているので、それを記してみる。

登内の城、小松の城（北側は八ツ手川が崖下を流れ、この川は屈曲し、西側に流れ、南側は自然の沢。平山式館草郭雑形、大手は東側、小松某の城主と伝承されている。城内に稻荷社を祀る。碑がある。

二 遺構

今回の調査では遺構の検出は何もなかった。その理由としては後

方の山麓の押し出しが強く、定住生活を営むには不適当な場所であ
った」とと推測できると思われる。



第2図 地形及びグリッド配置図(1:1,000)

三 造 物

(1) 土器 (第3図、図版5)

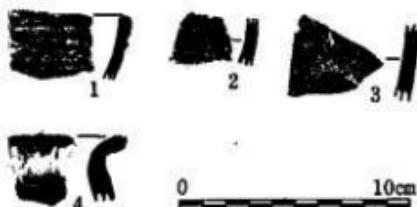
(1) は器厚が四~五mmの中厚手の土器に属しており、わずかに内反する口縁部の破片である。口縁はわずかに波状口縁を呈し、口唇は若干丸味を成している。文様は口縁に沿ってヘラによる沈線が横位に数条走っている。その文様の入り具合は若干工字文風になつていて、黒褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は普通である。

縄文晚期後半の大洞A式に属していると思われる。(2) の土器片はほぼ(1)と同様である。

(3) は外面に無数に、さらに不規則に貝殻条痕文を配してある。

黒褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は普通。縄文晚期終末期の貝殻条痕文の一派と思われる。

(4) は極めて外反の強い土師器の裏である。表面にカキ目痕が顯著に認められ、国分期の土師器であろう。



第3図 土器拓影



第4図 古銭拓影 (1:1)

(2) 古銭 (第4図、図版4)

竹之内薬師堂の裏、水田の地場層より出土した永樂通宝である。地中に埋没していた割には綠青の吹き出しが極めて少ない。おそらく鋳造する時に良質の銅を利用したのである。

(3) 陶磁器 (図版6-7)

今回の調査で出土した陶磁器は全部で五十片程であった。その内訳は大部分が近世で、数片ではあるが、室町中期、室町後期のものが含まれていた。出土した主なるものを第一表に記した。三片ではあるが須恵器片が含まれていた。

第一表 出土陶磁器一覽

図版 番号	名 称	時 期	備 考
6			
1	瀬戸鉄袖摺鉢	江戸中期	
2	瀬戸鉄袖行平	十九世紀	
3	瀬戸鉄袖摺鉢	十九世紀	
4	瀬戸鉄袖燈明皿	十九世紀	
5	瀬戸鉄袖碗	十八世紀後半	外面に炭化物付着
6	瀬戸灰袖小杯	十五世紀	口縁部
7	古瀬戸灰袖四耳壺	十八世紀後半	
8	瀬戸灰袖燈明皿	十七世紀中葉	
9	瀬戸灰袖碗	十八世紀前半	底部
10	瀬戸灰袖四耳壺	十六世紀後半	口縁部
11	古瀬戸鉄袖燈明皿	十九世紀前半	
12	伊万里染付半筒	大正期	

四 まとめ

梅雨の晴れ間をぬっての調査であったために、発掘調査の作業進行上、悪い面が重なってしまった。調査を実施した地区は前述したように、下部地層は湿地帯に、上部地層は山麓の押し出しによる砂層より組成されていた。この湿地帯より绳文晚期土器片が出土していることからみて、かつては晚期の湿田が展開していたのであろう。従って、晩期の居住地はもう少し北へよった微高地付近に存在したと想定されるが、今回、この地域は土地改良事業地区外であったために、発掘調査はできなかつた。

竹之内薬師堂のすぐ近くより永楽通宝が出土した。この古銭は中國明帝第三代永樂帝の時に鑄造されている。鑄造年代は一四三十年代であり、室町幕府三代將軍足利義満が行つた日明貿易（いわゆる勘合符貿易）の時に我が國に輸入されたといわれている。この銭は流通経済が急速な発達をとげた戦国時代頃には一般民衆にもかなり使用されていたものといわれている。

戦国期には六文銭の葬法がある程度定着化しはじめる。今回、永楽通宝が出土した地点が堂に近いところからして、葬法に使用した六文銭の一枚かも知れないが、発掘調査時に土壤が発見されなかつたので、この説も結論化するわけにはいかない。

出土陶磁器をみてみると、大部分は江戸時代中期頃で、わずかに室町中期、室町後期のものが混じっている。室町期のものは遺跡地のすぐ南側、八ツ手川をへだてて存在する小松の城と関係するものであらう。

近世の燈明皿の出土は竹之内薬師堂、あるいは松尾社と関係するものであろう。いずれにしても、現在は、これらの杜寺崇拝は衰退してしまつてゐるが、江戸中期頃にはかなり盛行したのであろう。

日常雑器である摺鉢、行平、碗、茶碗等々の出土は庶民の日常生活を実証するのに好資料となるであろう。日常雑器の出土した地点は、現在は、家屋が全くなく、ただ水田になつていてだけである。

陶磁器の年代からして江戸中期頃には庶民の民衆が実在したのであろう。民家滅亡後、水田にしたのであろう。

陶磁器鑑定は愛知県陶磁資料館学芸課長柴垣勇太氏、同館学芸員井上喜久男氏、仲野泰裕氏に依頼した。ここに三氏に対し、厚く御礼申し上げます。

（飯塚政美）



図版1 遺跡地を東側より眺む



図版2 発掘調査を実施したグリット



図版3 発掘風景



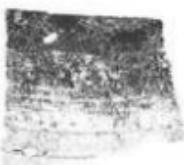
図版4 古銭出土状況



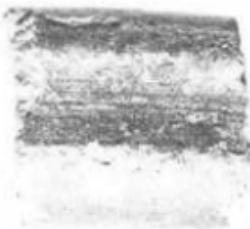
図版5 土器出土状況



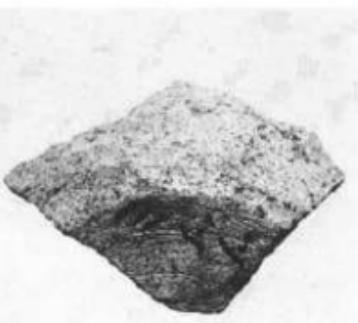
1



2



3



4



5



6

图版 6 出土陶磁器



7



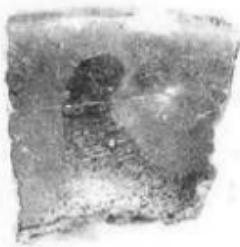
8



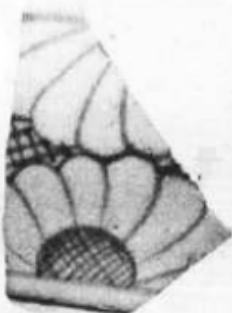
9



10



11



12

图版 7 出土陶磁器

島崎遺跡

一 発掘日誌

昭和六十年七月九日（火） 晴 伊那市考古資料館から島崎遺跡へ発掘器材を運搬する。午後、島崎遺跡の現地へテントを建てる。

昭和六十年七月十六日（火） 晴 堤林遺跡よりテント及び発掘器材を運搬し、七月九日に建てたテントの南へ、南北に長くもう一張、テントを建てる。テントの内がいつも整理・整頓がゆきとどくようすに隨所に棚を設ける。

昭和六十年七月十七日（水） 晴 八ツ手川に面した最南端の水田へ、ところどころグリット掘りを実施する。グリット掘りを実施する前にライ麦が茂げていたので、それを刈り取る。午後は南側から二枚目の水田のグリット掘りを実施する。表土面から1m位下つた面より砂層の堆積が厚く覆っていた。一枚目の水田の地場層直下の層より、かなり多量の中世末から近世初頭の陶磁器片の出土があった。その主なものは燈明風、皿等々であった。

昭和六十年七月十八日（木） 晴 下から三枚目の水田の草刈りを実施し、グリットを設定し、掘りはじめる。全般的に耕土は深く五十四cmもあった。近世の陶器片が出土した。水田のうちで、西側によつた方にやや多く遺物が出土した。

昭和六十年七月二十二日（月） 晴 宗明寺の存在したすぐ近く

の水田を掘りはじめる。水田の西側一帯に南北に長い帶状の落ち込みがみられた。午後よりこの落ち込み付近を拡張する。落ち込み付近より摺鉢の破片が出土した。

昭和六十年七月二十三日（火） 晴 昨日、検出された帶状の落ち込みを精査するに、どうも自然的につくられた可能性が強くなつた。午後は登内熱氏宅のすぐ西側の水田でためし掘りをする。さらにはその水田の北側の道に沿つた麦畑、テントを建てた水田へ、それぞれグリット掘りを実施してみる。若干の陶器片が出土した。

昭和六十年七月二十四日（水） 晴 登内熱氏宅の西側の水田とその北側の水田へブルトーザーを入れて耕土剥ぎを実施する。耕土剥いだあと、ただちに、登内熱氏宅の西側へグリットを打ち、一つおきに掘りはじめる。若干、陶器片が出土した。この水田の最も東、北よりの隅に黒い落ち込みがみられ、何かの遺構と思われたので拡張をする。

昭和六十年七月二十五日（木） 晴 前日、検出された遺構の拡張及び掘り下げを進めていく。夕方までに、ほぼ完掘する。底面より、水が吹き出してくることからして、集落の中心的存在である水溜めに利用したのではないだろうか。なかなか耳内耳土器片が出土。西方のグリットを掘り進めていくと独石が出土した。

昭和六十年七月二十六日（金） 晴 水溜め付近の西側一帯のグ

リット掘りを実施し、柱穴群の発見につとめるが何も検出されなか

った。午後は道に面した最も近いところにグリットを設定し、掘り

進めていく。遺物は若干出土したが、柱穴群の検出はなかった。

昭和六十年七月二十九日（月） 晴 水溜め遺構の平面及び断面

実測を終える。水溜め遺構の清掃及び写真撮影を終える。

昭和六十年七月三十日（火） 晴 道具のあとかづけをする。テントをこわし、発掘器材の水洗いをする。本日をもって現場の作業を終了する。発掘器材の運搬をする。

昭和六十年十二月～昭和六十一年一月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集

昭和六十一年二月 報告書を印刷所へ送る。

昭和六十一年三月 報告書を刊行する。

二 遺構（第2図、図版6）

今回の調査で検出されたのは中世水溜め遺構一基だけであった。調査を実施した時点では、縄文土器片、中世陶磁器片、近世陶磁器片等々合わせて、かなりの量が出土した。このことは、かつては前述した時代の遺構があつたと推測されるが、その後、数度にわたって実施された土地造成の時に少しづつ破壊されてしまつて、現存しないのであろうと思われる。

今回検出された中世水溜め遺構は中世村落の一端を想定できる極めて貴重な遺構であり、單に一基だけ検出されただけだと言ふ考えは捨てて、この遺構を通して、中世村落の広がる範囲を考えてみる

必要性が高くなるのであろう。

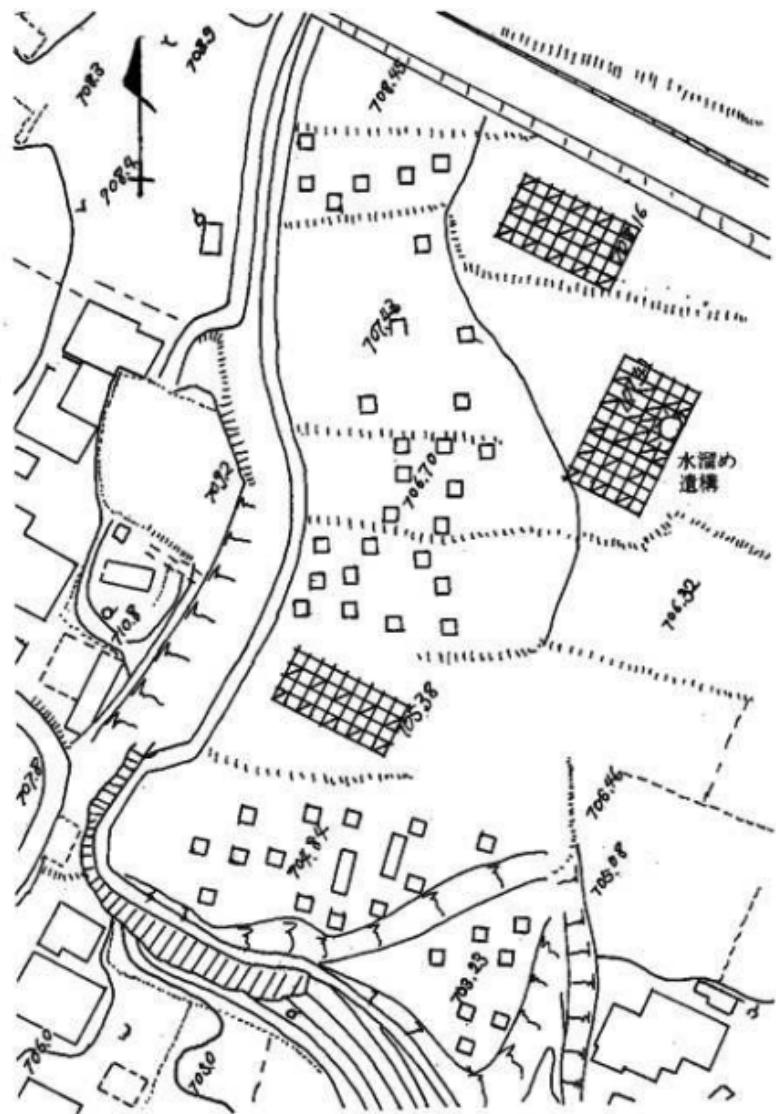
（1）水溜め遺構（第2図、図版6）

この遺構は今回発掘調査を実施した北東の一角に検出されているこの遺構から東へ十m位行った所には宅地が現存し、水溜め遺構の利用状況がある程度推測できるのであろう。

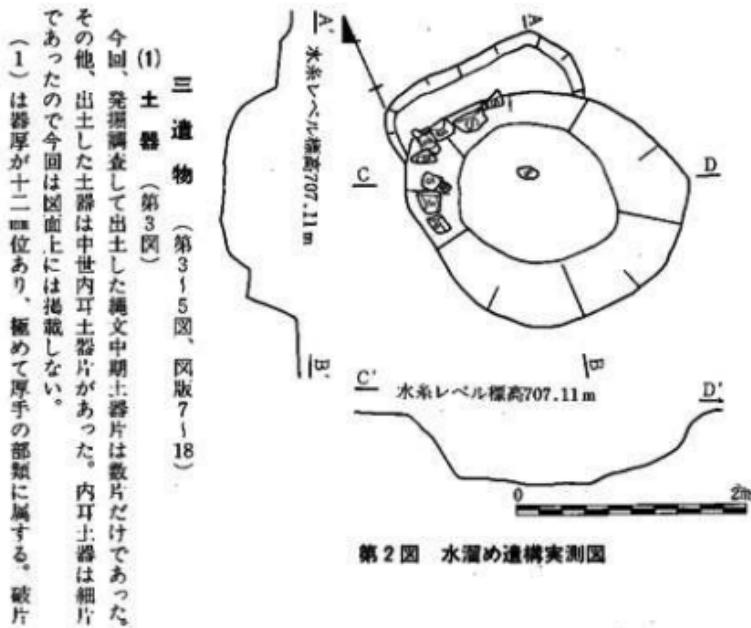
現況は水田であり、この水田耕作表土面より四十cm位下つた砂質状のローム層を掘り込んで、この遺構を構築してある。平面プランは上部ではところどころで角張った地点を認めるが、全体的には円形状を呈す。底面のプランは正円形状に近い様態を呈す。それらの規模は上面で南北二m五cm、東西二m四十八cm位を、底面で一m二十三cm、東西一m三十cm位を測る。北側の一角に南北四十cm、東西一m七十cm位の規模で、隅丸長方形状のテラス状遺構が存在している。これは水溜め遺構に付属するものであろう。

深さは五十cm～五十五cm位を測る。壁断面は四壁とも、やや湾曲状を呈す。壁面の下半分部は砂質の混合度合が高くなつておらず、しかも砂質自体の粒子もや大きくなつていて、底面は全般的に砂質層より盛り立ち、やや凸凹があり、軟弱状態を呈し、いたるところから水が湧き出している。

西壁から東壁にかけて、上面に大小様々な砂（花崗岩・变成岩）を置いてあつた。これは壁上面がくずれないのであろう。構築当時には壁を全面に敷きつめてあつたものと思われる。底面近くより内耳土器片が出土した。従つて、中世の遺構で、水を溜めて、飲料水に利用した可能性が強いと思われる。



第1図 地形及び遺構配置図(1:1,000)



出土した鈍粘石である。長円形状の閃錫岩を利用してあり、周縁及び全面にわたって丁寧に磨いてある。両側の尖端部は破損している。中央部付近は端面に凹み状を呈している。凸み状の両側に若干突起があり、高く立つたところがあり、これは全周した状態を成している。

(3) 陶磁器 (図版7-11、13-18)
今回の調査で出土した陶磁器片は全部で二〇〇片程あつた。そのうち一割弱は中世陶磁器片、残りは近世のものであつた。出土した主なるものを第一表に記した。

第一表 出土陶器一

					14					13	
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
瀬戸灰釉丸皿 古瀬戸灰釉仏 像 九世紀前半	"	"	"	古瀬戸灰釉皿 瀬戸灰釉碗	古瀬戸灰釉大盤 古瀬戸灰釉皿	瀬戸鉄釉招鉢 瀬戸鉄釉招鉢	瀬戸鉄釉招鉢 瀬戸鉄釉招鉢	瀬戸灰釉こね鉢	中津川大平鉢	名 称	時 期
十九世紀	"	"	"	十六世紀後半 十八世紀中葉	十五世紀後半 十七世紀後半	十六世紀前半 十七世紀後半	内面に炭化物付着 口縁部	"	十三世紀 十八世紀	備 考	
底部	"	"	"	大窯II期(口縁部)	口縁部	大窯II期(口縁部)	内面に炭化物付着 口縁部	"	底部		

固版 番号	名 称	時 期	備 考
18	白磁碗	十三世紀	口縁部(元國)
36	伊万里青磁碗	十七世紀前半	底部(国産)生焼
35	青磁碗	十五世紀	口縁部(明國)
34	古瀬戸灰釉内はげ丸皿	十六世紀中葉	底部 大窯口期
33			

四 まとめ

島崎遺跡は前述した堤林遺跡と東西に通る県道を境にして南側に広がっている。このようなために、地質の状態は堤林遺跡と同様に水田耕土直下に地場層があり、その下に砂層が厚く覆い、地表下四位で、湿地苔となり、水が湧き出してくれる。そのために、発掘調査を実施した初日の結果からして、古い時期の遺構の存在はないものと思った。遺構の存在があつたとすれば、中世・近世の遺構と思われた。おそらく、これらの時期の遺構は砂層面に存在するのである。

出土陶磁器の量から察して、中・近世の遺構はかつては相当数存在したと、想定できるが、これらの時期の遺構は浅い面に構築されていたために、水田造成や水田深耕のために大部分破壊されてしまったと思われる。

水溜め遺構内から内耳土器片が出士したので、中世に位置づけられる。本遺構の用途は日常生活の共同用水水汲み場であったと推測され、従つて、付近に中世から近世にかけての村落が存在したのである。

あろう。この遺構が村落共同体のどの場所に位置しているかは、單独な検出のために、その実態把握は不可能と思われる。

土器としては勝坂期と内耳土器がみられた。石器としては打製石斧と独石が出土した。打製石斧は勝坂期のもの、独石は堤林遺跡との関連からして撰文晚期にあてはまると思われる。

出土陶磁器類の中に、鎌倉前期から戦国時代にかけての中世陶磁器が含まれており、これらは近くに存在する小松の城、登内の城との関連を裏付け、二つの城の変遷を物語ってくれる確実な資料となるであろう。

中世陶磁器の器種としては大平鉢、摺鉢、大盤、皿、丸皿、甕等々の日常雑器と、中国青磁・白磁等々の舶来高級品が出土陶磁器総数の約5%の割合で出土している。日常雑器と高級品が一緒の場所で出土している事例からして、中世を通して、一般庶民の集落ではなくて、土家の集落の存在した可能性が強いよう考えられる。この仮説を結論づけるには、兵農分離がどの程度まで行きとどいたかという大きな問題が残るのである。

近世陶磁器類は出土陶磁器総数の九十五%を占めている。従つて中世よりも、近世の方が集落の活動が激しかった事を如実に証明している。用途を大別してみると、日常生活雑器と、祭祀用器がある。前者の器種としては、こね鉢、摺鉢、碗、茶碗、行平、鍋、鉢皿、後者の器種としては仏しお器、三足香炉、燈明受皿、香炉、ヒョウ燐がある。祭祀用器類の多いのは近くにあった宗明寺との關係であろう。『伊那市寺院誌』より宗明寺の由来について記すと次のようにある。本尊は十一面觀世音菩薩坐像(仏身高一四、〇〇、右

座高一九、〇cm(蓮華座)、光背、金泥舟形。開基は明暦二年(一六五六年)法印宗覚代。開基当時は鶴台金山宗明寺屋敷に在ったが元禄七年(一六九四)三月八日、現在地に移転した。

宗明寺の由来については確實に記録された史料はほとんど残存していない状況である。今回の発掘調査による出土陶磁器編年によつて、宗明寺の開基年代が伝承されてきた時期とほぼ一致をみたわけである。

陶磁器鑑定は愛知県陶磁資料館学芸課長柴垣勇夫氏、同館学芸員井上喜久男氏、仲野泰裕氏に依頼した。ここに三氏に対し、厚く、御礼申し上げます。

最後に、梅雨時から土用中の酷暑にかけて、地熱の上昇する地面に立ち向って、スコップを一振り、一振り、動かし、地中の埋れた庶民の生活実態を明らかにせんがために、発掘調査に直接従事して下さった作業員の皆様、及び調査に献身的に協力下さった各位に対し、厚い感謝を心から致す次第であります。

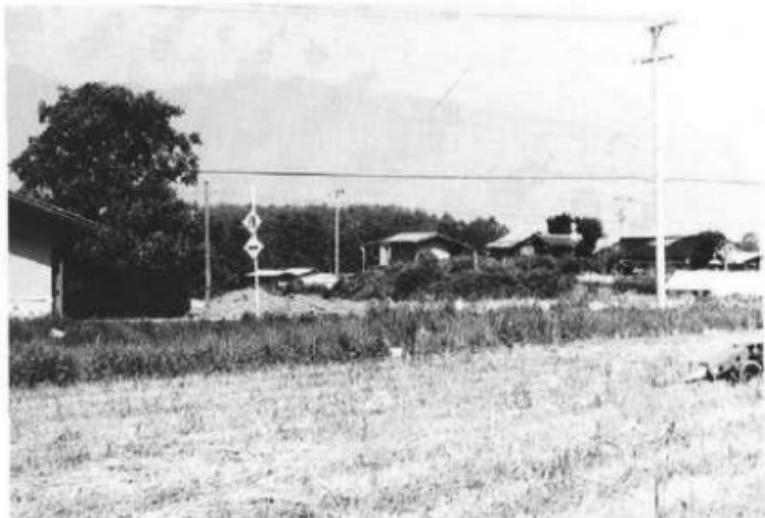
(付記)

中世遺跡・中世城館跡・近世遺跡の新しき動向及び研究方法について述べてみることにする。伊那市地域でも、大規模開発によつて中世の一般遺跡・墓地・城館跡等々の発掘調査事例が増加の傾向を示している。中世遺跡・中世城館跡・近世遺跡よりしばしば出土する陶磁器類の産地、編年学的研究は進歩し、現段階では熱残留磁気測定法に基づいて、四半世紀の編年組みが確立されつつある。今後は、これに留まらずに、さらに、編年の細分化がこころみられるこ

とは相違ないと思われる。

近年、中・近世遺跡を題材にした展示会や展覧会が各所で開催されるようになつてきている。

(飯塚政美)



図版1 遺跡地を北側より眺む



図版2 遺跡地を東側より眺む



図版3 発掘調査終了後のグリット



図版4 発掘調査終了後のグリット



図版 5 発掘風景



図版 6 水溜め造構



图版7 陶器出土状况



图版8 陶器出土状况



图版9 陶器出土状况



图版10 陶器出土状况



图版11 磁器出土状况



图版12 独居石出土状况



1



2



3



4



5

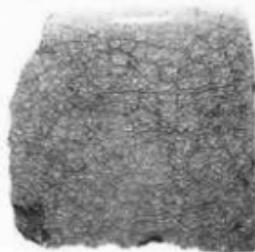


6

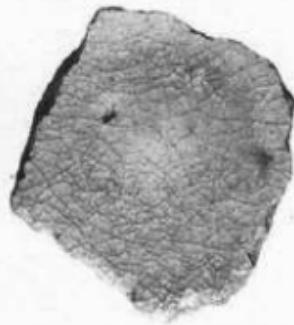
图版13 出土陶磁器



7



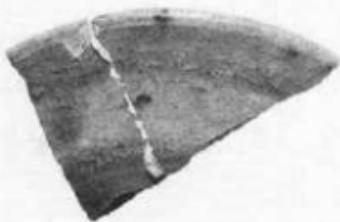
8



9



10



11



12

图版14 出土陶磁器



13



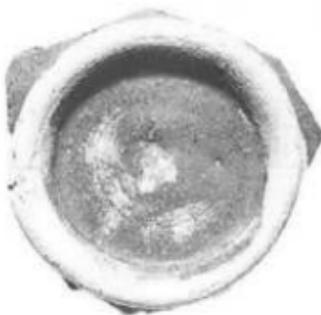
14



15



16



17

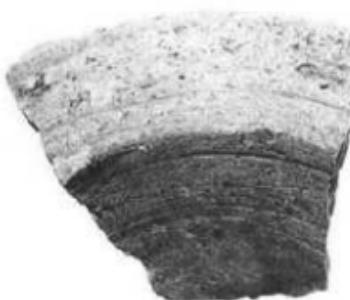


18

图版15 出土陶磁器



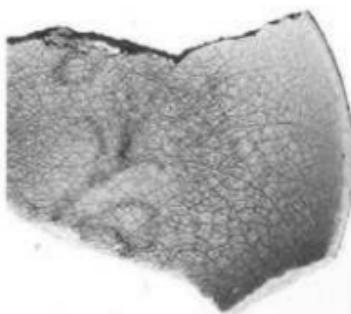
19



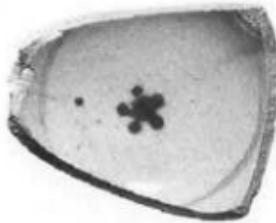
20



21



22

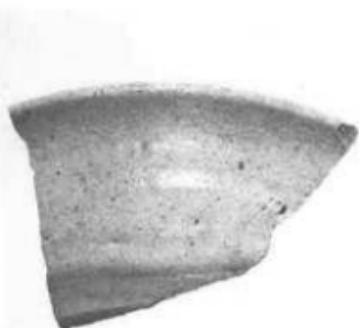


23

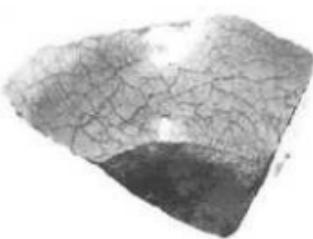


24

圖版16 出土陶磁器



25



26



27



28



29



30

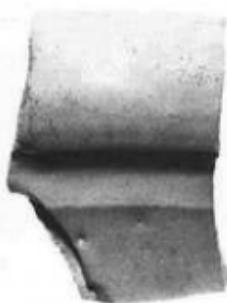
图版17 出土陶磁器



31



32



33



34



35



36

圖版18 出土陶磁器

堤林・島崎遺跡緊急発掘調査報告書

昭和61年3月10日 印刷

昭和61年3月15日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 ほおづき書籍株式会社
